

大学における日本語母語・非母語話者のためのアカデミック・ライティング教育の研究 —「情報の取り込みと情報への評価」の談話に注目して—

大島 弥生

学位取得年月：平成24年3月
取得学位名：人文科学博士
学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】論理的文章、初年次教育、談話分析、協働
【要旨】

近年、情報化社会の進展のもと、大学・大学院留学生に対する日本語教育および母語話者大学生に対する日本語表現教育の双方において、論理的文章作成の能力の育成が、中心的な課題として注目を集めている。情報化社会における論理的文章の談話展開においては、外部のリソースからどう情報を取り込んだかを示すことと、書き手がその情報をどう評価して文章中にどう位置づけたかを示すことが、とりわけ重要な役割を果たすと考えられる。

先行研究を見ても、この「情報の取り込みと情報への評価」を中心とした実践の提案や効果の検証はほとんどない。しかし、社会的要請に応じた大学でのライティング教育を考える上で、「情報の取り込みと情報への評価」に注目したプロセス重視の文章作成の実践の分析と、それを踏まえたカリキュラム構築が必要だといえる。そこで、本研究では、大学におけるアカデミック・ライティング教育の事例を紹介した上で、アカデミックなジャンル(学術論文と大学生のレポート)の談話の分析を通じてこの「情報の取り込み」と「情報への評価」という2つの構成要素の現れを探り、さらにそれを大学授業という枠組み(特に、学習者間の対話を重視する協働的学習デザインによる授業)の中でどう支援するかについて、授業実践の産物と相互行為の分析を通じて検討した。本研究は、これらの作業を通じ、「情報の取り込み」と「情報への評価」という分析視点が、アカデミックなジャンルの文章作成支援において有効であることを検証し、この点を重視した授業設計の必要性を示すことを目的とした。

具体的には、まず、本研究の背景とアカデミック・ライティング教育に関連する先行研究とを整理し(1章)、本研究の分析の枠組みと概念を整理した上で研究課題を設定した(2章)。本研究では、アカデミックな文章の談話分析において「情報の取り込み」と「情報への評価」という切り口が、学習の過程の分析においてバフチンとワーチの「収奪」と「内的説得力のある言葉」、およびヴィゴツキーの『意味』の作用」という切り口が、それぞれ有効であるとして採用した。

つぎに、大学初年次における「論証型レポート」作成の事例を紹介し(3章3-1)、レポート作成プロセスで学習者がどのように学びを進めているかを記述した(3章3-2)。また、レポート作成過程における学習者同士の対話を通じた学習活動の中で「情報の取り込み」と「情報への評価」がどのように行われているかを分析した(4章)。さらに、アカデミックな談話において「情報の取り込みと情報への評価」が重要な役割を果たしていることを検証するために、まず学習目標に当たるオーセンティックなジャンルである学術論文の談話(文章)のジャンル分析を行い(5章5-1)、学習者によるジャンルである「論証型レポート」との異同(5章5-2)、「論証型レポート」と作文との異同についても比較分析を行った(5章5-3)。6章では、アカデミックな入門期にしばしば課される小論文の展開と使用表現について、母語話者大学生・留学生間の比較を行い、小論文での参考資料の有無による談話展開の異同を示し、困難点を探った上で、支援策を検討した(6章6-1)。また、留学生と母語話者大学生のライティングを通じた学びあいの可能性を探るために、両者の間の作文交換を題材として、「情報の取り込み」のもととなる情報を与え合う者となる過程でどのような学びが起こるかについて分析を行った(6章6-2)。これらの分析の結果をもとに、7章では、有効な訓練を配置したアカデミック・ライティングの授業カリキュラムの設計について論じた。

(おおしま やよい)